

## 徳島県海部郡海陽町浅川の磯漁伝統

田邊 悟<sup>1</sup>

[Satoru Tanabe<sup>1</sup>: A report of the Tradition of Isoryo (Rockfish Fishermen) in Asakawa,  
Kaiyo Town, Tokushima Prefecture, Japan.]

キーワード：磯漁，イサリ，見突き漁，アワビ採取，伝統漁

### はじめに

明治41(1908)年に徳島県水産試験場が調査した資料(「徳島県漁具一覧」明治41年・徳島日日新報社印行)によれば、各漁具中に「<sup>かなつき</sup>金突」または「<sup>なまこかけ</sup>海鼠掛」(竿掛)あるいは「磯魚突」とみえ、村名ごとに捕採物が記されている。

その中から、本稿の主題設定である「<sup>イサリ</sup>磯漁」漁にかかわりのあるものを表にまとめたものが表1である。また、採藻をおこなう際、「手取り」以外で、船上より漁具を使用して海藻採取をおこなっているとみられる村々と、主な採藻の種類をあわせて表に掲げた。なお、「手取り」による海藻採取は裸潜水漁(アマ・海士・海女)によるもので、資料中には「海士」として表記されている。

本稿以前に、筆者が徳島県下でおこなった平成4(1992)年の関連調査の際、県内で「イサリ」(見突き漁)をおこなっていた地域は、宍喰漁業協同組合・鞆浦(以下漁業協同組合を略す)・浅川・牟岐町・出羽支所・牟岐東・日和佐町・木岐・西由岐・東由岐・志和岐・阿部・伊座利・伊島・椿泊・橘町・大渦(一人ないし二人)・中村・福村・今津(一人ないし二人)・長原(一人ないし二人)・里浦(一人ないし二人)・新鳴門・<sup>むろむさ</sup>室撫左・堂浦・北泊・小鳴門・北灘の28漁業協同組合(支所を含む)であった<sup>1)</sup>。しかし、その後、平成7(1995)年に『海南町史』(上巻)が刊行された際の記載内容によれば、浅川においてもイサリ(漁)を継続している漁業者は二人になっている。さらに、『海南町史』が刊行されてからすでに10年以上経過し、本調査を実施した平成18(2006)年においては、浅川ではイサリ(漁)を行っている漁業者は一人もおらず、わずかに話者(柿川幸吉氏)のみが、その経験者という現状にあった。

それ故、伝統的な漁撈習俗の調査を実施し、過去における漁撈の実態・知識・技術・経験等を記録して煙滅を防ぐことは、この分野の研究上からも重要な意味をもっているといえる。

わが国においては、太平洋戦争後の漁業制度改革による新しい漁業協同組合法の制定により、共同漁業権がもうけられたため、上述した明治41年当時の磯漁の状況と単純に比較す

2009年2月10日受付，2009年2月15日受理

<sup>1</sup> 千葉経済大学経済学部，〒239-0813 神奈川県横須賀市鴨居3-14-6. 3-14-6 kanoi yokosuka kanagawa Japan.

ることはできないが、21ある浦（地域）のうち、16の浦（地域）で、明治時代以降も伝統的に磯漁（イサリ）をおこなってきたことがわかる。また、各地域における魚種・漁法など捕採対象物や捕採方法などは漁業制度の改革とはかかわりなく、伝統的に継続されてきたことは当然である。

また、上述資料とは別に磯漁の史的背景について、磯本（2008）によると、明治22（1889）年に徳島県によって調査・編纂された『徳島県漁具漁法概調』にイサリにかかわる記載があるとする。

以下、その内容をみると、「第八十二図イサリ具ノ図」において、「長六尋」の「イサリノミ」、同じく「長六尋」、刃の長さ「五寸」の二又の突キ具が示されており、その説明には、「右（ママ）ノ具ヲイサリノミト云フ 此ヲ以テ鮑ヲ突返シ置キ 他ノコンガリツキト称スル具ニテ突キ止メ引キ上ルナリ」とみえる。

また、同じく「第八十三図」には「<sup>サザエ</sup>栄螺採り具ノ図」があり、「長四五尋」の柄の先に「檜木ヲ四ツニ挽割リテ栓ヲ挿シタルモノ」という図と、同じく「四本ノ木ヲ束ネ製シタルモノ」の2図がそえられている。

次の「第八十四図」は「黒菜採り具」で、名称は「鎌」。「長三尋半」の竹竿の先端に「通常ノ鎌ト全シ」ものがすげられている。同じく名称「カギ」は竹竿で「長三尋半」、先端は「木ノ枝ヲ以テ造ル」とみえる。両図を比較すると同じほどの竿の長さに見えるが、上述の「図」を見るかぎり、アワビを突き採るコンガリツキと、サザエ採りの2本の竿は竹材でないことがわかる（磯本、2008：35）。



図1. 浅川湾周辺地図（国土地理院発行 25,000:1 地形図『奥浦』『牟岐』）

さらに磯本（2008）によると、「イサリ具ノ図」に関しては、「冬季ハイサリト称シ第八十三図ノ如キ具ヲ以テ船中ヨリ之レヲ採ル尤モ海底五六尋ノ所ニ於テハ眼力ノ達シ難キ故ニ口ニ糠ヲ含ミ水面ニ擴カリテ水透明トナリ大ニ視力ヲ助ケルト云フ」という解説と、「榮螺採り具ノ図」に関しては、「此ノ具ハ鮑ト同シク水中ニ入りテ漁ス尤モ器具ヲ用ユルヲナシ寒冷ナル時ハ第八十三図ノ如キ具ヲ用ヒ船中ヨリ突キ挟ミテ採り上タルナリ」（徳島県、1889）とみえることに注目しておきたい。

前述の如く、イサリ漁が衰微していく背景には、捕採対象物の資源の枯渇もみのがせないが、あわせて、子供の頃からの漁撈技術の習得（箱眼鏡で海中・海底の捕採対象物を見つける・獲物を見つけると箱眼鏡を口にくわえ、足で櫓を操、手で櫂をあつかったり、手で竹竿の先端につけた漁具を使うなど）が充分におこなわれない結果であるとみてよい。

こうしたイサリにかかわる漁撈技術の習得は、子供の頃からカジコとして操船する技術をおぼえたり、捕採の「勘」を身につけるなどの日常的な体験的学習が必須であるため、今日のような社会の暮らしの中では、その技術を習得する機会も場もないのである。

こうしたイサリ漁の衰微の原因があるため、伝統的磯漁の再生を望むことは不可能である。それ故、本稿においては、この転換期に直面している海浜社会の伝統的な漁撈習俗を調査し、記録しておく必要性を痛感し、浅川浦（地区）において、すでに旧廃漁業となってしまったイサリ（漁）の貴重な聞き取り調査結果を報告する。

### 漁業生産暦と漁法

調査地の浅川では、磯漁（見突き漁）を「イサリ」という。イサリは「イサリデンマ」または「テンマ」とよばれる小漁船の上から海中・海底を覗き見て、長い竿の先に付けた各種の漁具を使用し、アワビ・サザエ・ナガレコ（トコブシ）などの貝類、アントク（ヒロメ）・テングサ・モズクなどの藻類を採取するほか、ウニ・タコ・各種の磯魚（エガミ・タカノハ・グレ〈メジナ〉）などを捕獲する漁法である。漁業生産暦を表2に示す。

イサリによるアワビ採取は、2月1日にはじまり、9月14日まで続く。アワビ採取をする場合、アワビの餌となる褐藻類の繁茂（成育）している岩礁には、同じ海藻を餌としているサザエも生息しているので、見つけしだい採取する。調査当時、アワビは資源保護のため、殻の大きさが9センチ以上のものを採取していたと聞いた。

浅川の海は湾になっているため、「入江は波がゆるい」ので、ナガレコが採取しやすく、イソの割目にナガレコが並んでいることがあるという。ナガレコは12月10日頃から採取がはじまり5月下旬まで。漁獲があれば8月頃までつづく。

浅川では「ウニ」のことを「カゼ」と呼んでいる。カゼの種類にはクロカゼ・ムラサキカゼ・アカカゼの3種類がある。一般にいう「バフンウニ」はないと聞いた。クロカゼの採取時期は12月10日にはじまり、暮れの28日頃までつづけ、翌年の正月は1ヶ月ほど休漁するが、7月いっぱいまでが漁期であった。漁があれば9月中旬頃まで続けた。ムラサキカゼは1月初旬より、4月下旬までが漁期であった。また、アカカゼの採取は5月初旬にはじまり、9月中旬頃までつづけられてきた。

海藻採取で特筆すべきは「アンロク」（ヒロメともいい、アラメに似た褐藻だが、やわらかく美味）が、この地の特産物になっていることである。アンロクは2月初旬より採取がは

表 1-1 明治 41 年・徳島県における磯漁の状況（「徳島県漁具一覧」・明治 41 年より作成・徳島県水産試験調査・徳島県日新報印行による）

番号	郡名	村名	漁具名 (雑漁具)	主な採藻名	数量	作業人員	漁具名 (採藻)	主な捕採物	数量	作業人数	
1	海部郡	浅川浦	金突	タコ	5隻	10人					
			磯魚突	磯魚	2隻	4人					
2		出羽島	金突	磯魚	3隻	18人					
3		日和佐浦					竿巻	ワカメ	25隻	50人	
4		木岐浦	金突	タコ・サザエ・ナマコ	7隻	14人	鎌手・竿巻	ワカメ・アラメ・カジメ	40隻	80人	
5		東由岐浦					竿巻	ワカメ	20隻	50人	
6		志和岐浦					竿巻	ワカメ	15隻	45人	
7		伊座利浦					竿巻	ワカメ	10隻	30人	
8		蒲生田浦					竿巻	ワカメ	28隻	65人	
9		伊島					竿巻	ワカメ	10隻	20人	
10	那賀郡	椿泊浦	竿掛	ナマコ	40隻	70人	竿巻	ワカメ	60隻	120人	
			金突				鎌切り	アラメ・カジメ			
11		橋浦	海鼠掛	ナマコ	16隻	32人	鎌手・竿巻	アラメ・ワカメ	10隻	20人	
			金突	チヌ・エイ・タコ・アイ	10隻	20人					
12		中林浦					竿巻	ワカメ	50隻	100人	
13		福村					竿巻	ワカメ	40隻	40人	
14		中島浦	海鼠掛	ナマコ	5隻	5人	捻採	ワカメ	20隻	20人	
15		勝浦郡	大原浦	海鼠掛	ナマコ	50隻	50人				
16		板野郡	里浦					竿巻	ワカメ	100隻	500人
17			土佐泊浦	金突	ナマコ・カレイコチ	6隻	12人	鎌手	ワカメ	85隻	170人
18	堂浦						竿巻	ワカメ	50隻	100人	
							熊手掛	テングサ	2隻	4人	
19	北泊浦		金突	タコ・サザエ・セトガイ	20隻	40人	竿巻	ワカメ	40隻	80人	
			熊手掛	セトガイ	30隻	30人					
20	大島田		金突	アイ・カレイ雑魚	3隻	6人					
21	北灘	金突	雑魚	5隻	10人						



表 1-2 明治 41 年・徳島県内における海士（アマ）の稼働状況（「徳島県漁具一覧」・明治 41 年より作成・徳島県水産試験場調査・徳島県日日新報印行による）

番号	郡名	村名	漁具名 (採藻方法)	主な採藻名	数量	作業 人員	漁具名 (捕採方法)	主な捕採物	数量	作業 人数	
1	海部郡	穴喰浦	手取	テングサ・フノリ	2隻	15人	海士(アマ)	アワビ・サザエ	12隻	15人	
2		浅川浦	手取	テングサ・フノリ・アマノリ	15隻	50人	海士	ナガレコ		多数	
			海士	アラメ		30人					
3		出羽島	海士	テングサ・アラメ・カジメ・トリアシ	5隻	25人	海士	アワビ・ナガレコ・サザエ	5隻	25人	
4		牟岐西浦	手取(海士)				8人	海士	アワビ		1人
5		牟岐東浦	手取(海士)	テングサ	10隻	80人	海士	アワビ・ナガレコ	10隻	50人	
6		日和佐浦	海士(鎌手)	ワカメ・アラメ・カジメ	6隻	30人	海士	イガイ・サザエ・アワビ・カキ	6隻	30人	
			海士(手取)	テングサ・トリアシ	6隻	30人					
7		大岐浦	海士	テングサ			10人	海士	アワビ・ナガレコ		7人
8		東由岐浦	海士	トリアシ・テングサ・カジメ	6隻	20人	海士	アワビ	6隻	20人	
9		志和岐浦	海士	ワカメ・アラメ・カジメ	10隻	120人	海士	アワビ・ナガレコ・サザエ・タコ	4隻	48人	
10	阿部浦	鎌手(海士)	ワカメ(テングサ)	45隻	200人	海士	アワビ・ナガレコ	7隻	80人		
11	伊座利浦	海士				20隻	85人	海士	アワビ・ナガレコ	2隻	10人
12	那賀郡	伊島					海士	アワビ	10隻	60人	
13		椿泊浦	海士	アラメ・カジメ・トリアシ	4隻	10人		アワビ・サザエ	4隻	10人	

じまり、5月下旬までつづく。

海藻採取は種類により、漁業協同組合の正組合員ばかりでなく、その家族も参加することが多いため、漁協独自の解禁日を定めている。ヒジキ採取の場合は、2月初旬の大潮の日が「口明け」で、2日間ほどで岩礁上に繁茂しているヒジキをすべて「カマ」で採取してしまう。その他、テングサ・フノリ・モズクなどの海藻を採取するが、春から夏にかけて、テングサ・フノリ採取などの口明けも組合で定めている。また、モズクは年間をどうして採取は可能であるが、自家消費程度の採取で、商品にはなっていない。

話者がイサリ以外におこなった漁としては「コアミ」と呼ばれるイセエビ網漁があった。漁期は9月15日から翌年の5月中旬まで。漁獲物はイセエビの他に磯魚やサザエがかかることも。また、出稼ぎ(乗組員)として東北地方へ出かけ、サンマ棒受網漁をおこなったこともあった。漁期は9月15日から12月10日頃までであった。サンマの棒受網は20人以上もの漁夫が乗組んで操業した。出稼ぎとしては、カツオ一本釣もあった。4月中旬から5月下旬にかけ、出稼ぎ漁夫としてカツオ船に乗組んだこともある。末娘(七女)の秀世さんも、子供の頃の父親のいない日々を記憶しているという。

話者の柿川幸吉氏がイサリをはじめたのは、昭和30年頃からだという。大正8年生まれなので、37歳ぐらいになってからということになる。若い頃は中国大陸方面の戦地へ出かけ、終戦後になり、故郷にもどってからの仕事であった。話者が子供の頃にイサリについての「勘」を教えてもらったのは父親の三吉さんであったと聞いた。また、結婚する前まで父親

表2. 徳島県海部郡海陽町浅川の漁業生産暦(新暦), 柿川幸吉氏聞き書(大正8年2月11日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘要
イサリ	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	アワビ・(サザエ) 2月1日～9月14日 ナガレコ・(サザエ) 12月10日より クロカゼ 12月10日より(正月休み) ムラサキカゼ アカカゼ 9月14日まで あんろく(海藻)
コアミ (イセエビ網)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	ヒジキ 2月の大潮 モズク(年中) イセエビ・磯魚
サンマ棒受網												■	9月15日～12月10日 出稼ぎ(乗組員)
カツオ一本釣				■									4月20日～5月下旬 乗組員として出稼ぎ

と一緒の船に乗って操業していた。だがその後、父親があまりにも口うるさく注意（指導）するので、一人で操業するようになったが眼が良いのでかなり漁獲があったとも聞いた。話者は、イサリ（漁）が主で、農業をおこなったことがない。それは他の家族も同じであった。

### イサリ（漁法）と漁具

上述したように、イサリは、船上より海中・海底を「ハコメガネ」を用いて覗き見て、アワビ・サザエ・ナガレコ等の貝類をはじめ、海藻・ウニ・タコ・磯魚などを長い竿の先につけた各種の漁具を用いて捕採する漁法である。

イサリでのアワビ採取は、海底の岩礁に生息しているアワビを船上から「ハコメガネ」を用いて見つけると、「アワビのヒッカケ」（イサリノミともいう）を用いて、アワビの殻のいちばん大きな殻穴（あながやや高くなっている）か、少し盛りあがっている孔列にかけて、アワビを岩礁から剥がす。その後、小さなタマ「コダマ」を用いて海底からアワビを採りあげた。アワビは三尋から五尋ぐらいの水深に生息していることが多い。

サザエは「サザエツキ」（サザエヤスともいう）を用いて採取する。メダケ（女竹）の先端を三つか四つに割り、中心部をとめて広げた状態につくり、はさみ込む。一人で操業する場合に用いるサザエツキの竹竿は二尋か三尋のメダケでやや短い竹竿だが、二人乗りのイサリの場合は、長さが、三尋以上の竹竿を用いるなど、多少の差がある。これはアワビ採取のときも同じで、二人で出かける場合は操業の範囲も広く、深場に出ることが多いためである。

ナガレコを採取する場合は、先端がカギ状になっている「ヒッカケ」と呼ばれる漁具を用いる。メダケの竹竿の先に付けられたヒッカケは、先端が一本だが、カゼを専用に採取する「カゼカケ」（カゼカギともいう）は先端が二又うらがみかわになっている。形状はほとんど変わらない。

上述のような漁具に用いる竹竿（棹）は、地元の浅川湾に流れ込む浦上川とよばれる小さな川の淵などにはえているオンナダケ（女竹）を用いた。オトコダケは節が高いし、太すぎるので使わない。また、「アワビのヒッカケ」をはじめとする漁具の先端部分は、金物屋でハガネ材などを購入し、自製したものをを用いた。

浅川では「ウニ」を「カゼ」と呼ぶことは上述の通りである。カゼを採取するには、竹竿の先端に針金二本を曲げた「カゼカケ」と呼ばれる道具を使う。「カゼカギ」の名もある。

冬季にはナマコを捕獲することもあり、その時使う漁具は「ナマコカケ」と呼ばれる、先端が二本または四本のカギをメダケの先端に取り付けた道具を用いて船上へあげた。

浅川における海藻採取で主要な種類は「アンロク」である。アンロクは、アンロクメとも呼ばれ、「ヒロメ」とも呼ばれる。前述した明治期の記録に記載されている「黒菜」のことであるかどうかは確認できなかった。

アンロクは一見するとアラメのように見えるが、やわらかい海藻なので一般に人気があり、この地の特産物の一つに数えられている。採取するには、竹竿の先端にカマを取付けた漁具を用いる。名称は一般に「カマ」と呼ばれている。上述した「第八十四図 黒菜取り具」（徳島県 1889）にあたるものであろう。

海藻の種類の中でもヒジキは2月初旬の大潮の日を口明けとしており、2日間ほどで岩礁上にはえているヒジキは刈りとられるが、この日には、一般家庭で草刈りに用いるカマを兼用する。

モズクを採取することもあるが、自家消費程度であるため、特に専用の漁具を準備するようなことはなく、イサリに用いる船上にある漁具で、都合のよい道具を使う。

イサリで捕獲する主な磯魚の種類は、エガミ・グレ（メジナ）・タカノハ・イサキの他、チヌ・カワハギ・タナゴなどがある。また、タコを捕獲することも。エガミは普通の大きさは2キロから3キロの重量だが、大きなものになると1匹で4キロもあるものが漁獲できた。磯魚を突くためには「カナツキ」（ヤスともいう）を用いる。カナツキの先端は二本に分かれているもの、3本に分かれているものなどあり、漁獲対象魚の大きさなどによって使い分ける。いずれもカナツキの先端部分は浅川にあった鍛冶屋（調査当時は山本鉄工所といった）に注文して製作してもらい、メダケの竿に自分達ですげた。

イサリをおこなう際、イサリデンマ（テンマともいう）の船上より、海中・海底を覗き見る四角いメガネを「ハコメガネ」と呼んでいる。話者はハコメガネを自製したという。自製のものは杉材（杉板）を用いた四角型のものであった。浅川湾内は波が静かなため、ハコメガネも比較的小型で、重量もないものが使われてきた。ガラスは板ガラスをガラス屋より購入した。また、後に丸型のメガネも使われるようになったが、丸型メガネは地元にあった桶屋に注文して製作してもらった。このように、イサリ用のハコメガネ（四角型）は、後に桶屋が丸型のものを製作するようになって、名称だけは「ハコメガネ」として残ったことが『海南町史』（上巻）の「採貝漁業」に掲載されている写真の説明からも伺うことができる（海南町史編さん委員会、1995：1136-1138）。

ハコメガネが使用される以前は、口に糠をふくみ、海面に吹きつけ、糠の油分が海面にひろがったところで海中・海底を見定めていたことが『徳島県漁具漁法概調』に記されていることは前述の通りである。

なお、イサリにハコメガネを使用するようになった年代に関しては、明治36年5月に、土佐泊浦漁業組合から「里浦対和布採取ニ付箱眼鏡及柄鎌禁止反対意見書」が県知事あてに提出されており、その内容として、「当組合ニシテ和布採取ニ付前器具使用セズテハ盲者ニ杖無キガ如キ状態トナリ・・・」（土佐泊浦漁業組合、1923）と意見しているところから、明治35年頃にはハコメガネが県内で使用されはじめていたとみられる。また、明治39年5月に、当時の室撫左<sup>むろひだり</sup>漁業組合から県知事あてに、組合臨時総会の決議として、「箱眼鏡使用禁止」を解除してもらいたいとの願いが提出されている（土佐泊浦漁業組合、1923）。同じ県内の木岐では、明治39年に「箱眼鏡使用特許の件詮議相成難し」という史料が記載されている。この資料は『由岐町史』（上巻・地域編）の「イサリ漁」の項に揚げられているもので、同年11月26日の申請に対する同12月28日の県知事谷口留五郎の通達であるといえることから、当時、木岐の漁業組合では、イサリ（漁）に箱眼鏡が使用されていたであろうことが伺われる（由岐町史編纂委員会、1985：775）。以上のことをあわせみるに、徳島県下でハコメガネが使用されるようになったのは、地域差はあるにせよ、上述の年代であったとみることができる。

### イサリデンマ（漁船）と操船

浅川では、イサリをおこなうために使用する小型の木造和船を「イサリデンマ」または「テンマ」とよぶ。イサリデンマは町内の柳口造船所（調査当時）とよばれた船大工に注文し



て製作してもらった。

イサリは、話者が若い頃、イサリデンマに2人で乗って操業していたという。話者以外にも2人乗りはあった。一緒に乗って、船のトモで櫓や櫂をあやつる者をカジコ（舵子）といった。イサリデンマは全長が4メートルから5メートルあった。肩幅は1メートル半ほど。2人で出漁するときは、一般に船のオモテのトリカジ側（進行方向左側）で操業した。カジコは主に船のトモのトリカジ側で櫓を押す。また、カジコは櫂を使って船を微妙に操船する。1人でイサリデンマに乗って操業する場合は、風に向って船を立てる。その時は船のトモのトリカジ側に正座して作業をおこない、トコブシ・ウニなどを掬いあげて船上に切り込んだ。あわせて櫓や櫂を用いるが、両手で作業する時はハコメガメを口でくわえ、足で操船する場合もあったので技術を必要とした。近年になり、船外機が普及したので、船外機を取り付けでの操船となった。

### その他の聞取り

調査地の「浅川浦」は徳島県内でも、高知県との県境近くに位置する。浅川湾周辺は入江が多いため、磯の波がゆるいのでイサリをおこなうのに適しているが、高知県側に入ると、甲浦をはじめ室戸岬までの海岸一帯は、海底に大きな石やハエが多く、水深も渚からすぐに10メートルをこす深さになるため、イサリに用いる竹竿（棹）が海底までとどかないところが多い。5メートルほどの短い、普通の竹竿につけた漁具では操業ができないと聞いた。それにあわせて、外洋に面しているため、年間を通してうねりがあり、イサリ漁法はむいていないため、高知県側では、アワビ・サザエ・ナガレコなどの貝類やアンロク（ヒロメ）・テングサなどの海藻類は、すべて男女によるモグリ（裸潜水漁）によっておこなわれてきたという。

浅川湾に隣接する高知県の室戸岬東漁業協同組合甲浦支所の地先漁業権は、東が徳島県との県境にある二子島から、西は生見川いくみがわの川口に近い松ヶ鼻までである。近くの竹ヶ島は徳島県側にはいるが、岩礁地帯がほとんどないため、甲浦ではイサリ（漁）は商売にならない。それ故、男女の「アマ」が全体で5人から6人おり、潜ってアワビ・サザエ・ナガレコその他、海藻採取をおこなっている程度にすぎない。このような状況（海況）は室戸岬まで同じであると聞いた。

### まとめ

この資料調査は、筆者が平成18年（2006）11月6日に実施したものである。調査内容は徳島県海部郡海陽町浅川字川ヨリ西35に在住の柿川幸吉氏（大正8年2月11日生）からの聞取りをまとめたものである。「はじめに」でも述べた通り、調査当時、イサリ（漁）はすでに旧廃漁業になってしまっていた。

本調査にあたり、話者の柿川幸吉氏を紹介していただいたのは浅川漁業協同組合の福岡氏であった。調査当時、話者は体調をくずしておられたが、心よく対応していただくことができたことを感謝している。また、妻の柿川千代子さんにも調査でご協力をたまわった。さらに、調査内容に不明な点があり、確認を必要とする場合など、手紙や電話による内容確認は七女（話者宅は子供七人がすべて女性）の柿川秀世さんにご迷惑をおかけした。あらためて

謝意を表するしだいである。

『海南町史』（海南町史編さん委員会、1995）に記載されている当地域の採貝・採藻にかかわる漁業は、以下の通りで、きわめて簡単である。

「採貝漁業は採藻とともに最も原始的な漁法であるが、アワビ、トコブシ、サザエ、ウニが主な対象物で、浅川では海士25人～16人、海女5人～6人が周年この漁業に従事している。1トン、30馬力の船外機に乗り、1人で操業しているが、中には夫婦2人で操業する船もある。

採貝の方法も浅川の磯は遠浅になっているため、大潮などのときは、女性も胸まで潮につかり箱眼鏡や鉤、小さなタモ網などを使って採っていた。

男子が行うイサリ漁は、1トン前後の船で船縁小縁から体を乗り出し、箱眼鏡で海を覗いて獲物を見つけると鉤・金てこ・金突、こだまなどをつけた竹竿で貝やタコ、磯魚などを突いたり、すくい揚げたりして採るが、獲物を見つけると箱眼鏡は口にくわえ、足で櫓を操り、両手で竹竿を使うという難しい根気のいる作業が続くため、後は減少の一途をたどり、平成初年現在では、浜崎眞一と柿川幸吉の2人だけになってしまった」（海南町史編さん委員会、1995：1136-1138）。



写真1 話者の柿川幸吉氏（大正8年2月11日生）。調査当時平成18年11月6日満87歳。

また、「潜水漁業は、男女ともに海士（アマ）と呼んでいるが、明治末には15隻、30人、昭和元年には2隻、20人で3000円余りの漁獲を揚げている。船による操業と岸近い岩礁地帯を陸からした人があったためである」（海南町史編さん委員会、1995:1138）と記している。

こうしてみると、徳島県の南西部から高知県にかけては、岩礁性の海岸が発達していてもイサリが不可能な条件の地域では、裸潜水漁（アマ）による魚貝藻類等の捕採がおこなわれてきたことにあわせて、上述したように、冬季においては裸潜水漁（アマ）による魚貝藻類等の捕採ではなく、「イサリ」による捕採が伝統的におこなわれてきたことがわかる。

また、覗き眼鏡（箱眼鏡）使用以前の徳島県内の状況を聞き取り調査以外の資料中より、具体的に確認できたことは、過去におけるイサリの実状を集積し、一歩ずつではあるが実証的に明らかにすることができたことになり、意義深い。特に筆者がこれまで注目してきた「覗き眼鏡使用以前」（ガラス導入以前）の磯漁の実態を実証的にとらえるということにおいて一石を投ずることができた。このことは、今後、日本全国の沿岸漁業にかかわる漁撈文化（沿岸文化）の足どりを明らかにするために裨益することになる。

## 注

1) 田邊（2003）および條半吾氏（徳島県漁業史編さん協議会委員）のご教示による。

## 引用文献

- 磯本宏紀. 2008. 伝統的磯漁としてのイサリとアマ(1) - 美波町木岐・牟岐町牟岐浦の事例 -. 徳島地域文化研究, 6: 32-43.
- 海南町史編さん委員会編. 1995. 採貝漁業, 採藻漁業. 海南町史 上巻: 1136-1139. 徳島県海部郡海南町, 海陽町.
- 田邊 悟. 2003. 徳島県阿南市及び鳴門市の磯漁伝統. 千葉経済大学学芸課程紀要, 9: 1-15.
- 徳島県編. 1889. 徳島県漁具漁法概調. 徳島県, 徳島.
- 徳島県立博物館編. 2006. 展示図録 海人の見た世界. 94p. 徳島県立博物館, 徳島.
- 土佐泊浦漁業組合編. 1923. 鳴門漁業誌. 土佐泊浦漁業組合, 鳴門.
- 由岐町史編纂委員会. 1985. 由岐町史. 上巻. 地域編. 由岐町教育委員会, 美波.

